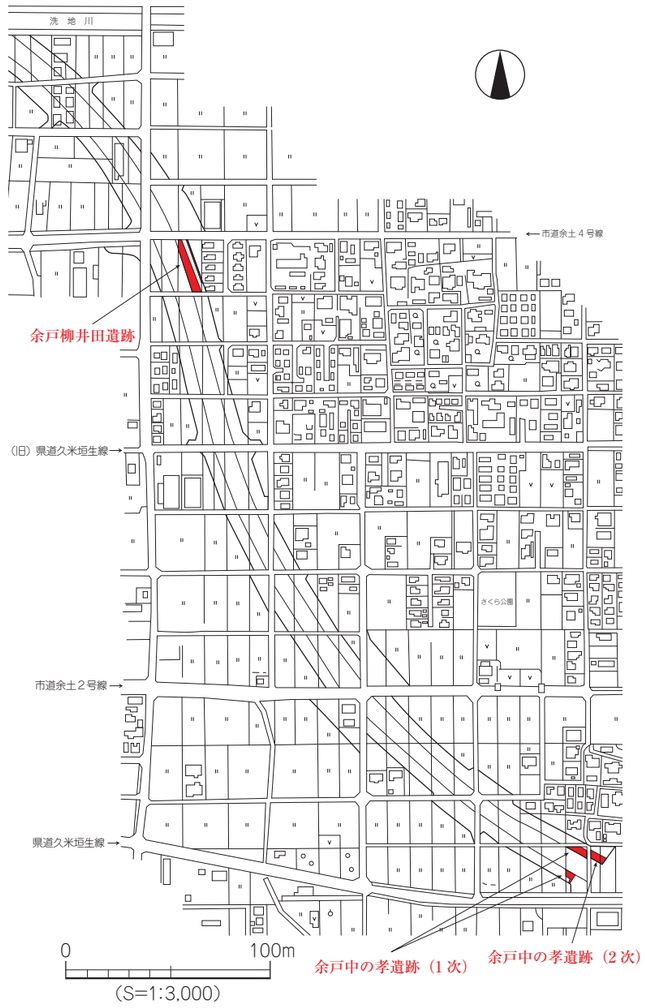
# 余戸柳井田遺跡（ようごやないだいせき）・余戸中の孝遺跡（ようごなかのこういせき）

## 現地説明会資料

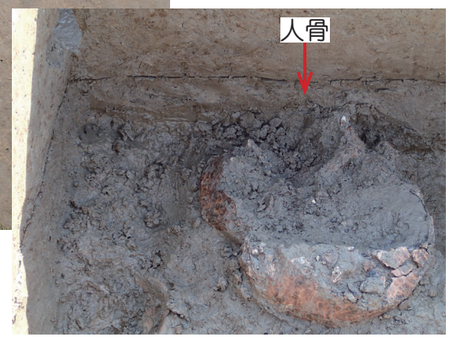
平成 27（2015）年 3 月 28 日（土）

**事 業 名**：松山外環状道路（余戸西工区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
**委 託 者**：松山市（事業主体：松山市都市整備部道路建設課）
**調査主体**：公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター
**調査場所**：松山市余戸西二丁目 2331 番 1 の一部　他
**調査期間**：平成 27 年 1 月 13 日（火）～同年 3 月 31 日（火）
**調査面積**：約 650㎡

余戸柳井田遺跡からは、水田耕作に伴う足跡を発見しました。出土遺物や検出層位より平安時代以降、室町時代（11 ～ 15 世紀）頃まで存在した水田址と考えられます。一方、余戸中の孝遺跡では鎌倉時代（13 世紀）の建物址や溝、土坑のほかに土坑墓などの遺構が見つかりました。このうち、土坑墓は円形状に掘られた溝を伴っており愛媛県内における中世墓では初めての検出事例です。遺跡が所在する松山市余戸地区では、これまでに本格的な発掘調査は実施されていませんでしたが、今回の調査により中世集落の存在が明らかになりました。



土坑墓 検出状況




土坑墓 遺物出土状況

## 出土品

調査では、平安時代後期（11 世紀）から室町時代後期（15 世紀）頃までに使用された土師器や須恵器、瓦質土器などのほかに中国産陶磁器（青磁）が出土しました。出土品には、砥石や鉄滓なども含まれています。

### 【用語解説】

**遺構**（いこう）：人間が残した痕跡のうち、動かすことのできないもの。居住などを示す建物址、溝、墓などのほか、水田や畑など生産にかかわるもの。
**遺物**（いぶつ）：過去の人類が残した土器や石器など、動かすことのできるものの総称。
**土坑**（どこう）：発掘調査などの際に確認される遺構のうち、人間が土を掘りくぼめてできたと考えられる穴で、性格が見極めにくいものを指す。
**土坑墓**（どこうぼ）：土を掘りくぼめて穴（土坑）を作り、そこに人の遺体を納めて埋葬した遺構。
**掘立柱建物**（ほったてばしらたてもの）：地面に穴を掘り、そこに柱を立てた建物。四隅と、その間に柱を立てることから、建物があった所は四角形状に柱が並ぶ。
**土師器**（はじき）：弥生土器の流れをくみ、古墳時代から奈良・平安時代まで生産され、中世・近世のかわらけ（土器）や炮烙（ほうらく）に取って代わるまで生産された素焼きの土器。
**須恵器**（すえき）：青く硬く焼き締まった土器で、古墳時代の中頃に朝鮮半島から伝わった焼成技術をもって焼かれた焼物。
**瓦器**（がき）：暗灰色の軟質の土器で、昭和時代前半頃まで多く利用された灰色の屋根瓦に似ていることから、この名前がある。窯を用いて生産し、焼成の最終段階で炭素を表面に吸着させるため暗い灰色を呈する。近畿地方西部を中心に鎌倉～室町時代前半期に生産され、西日本を中心に流通する。
**青磁**（せいじ）：青緑色の釉薬をかけた磁器。紀元前 14 世紀の中国（殷）が起源とされ、後漢時代に流行し、以後普及する。

## 余戸柳井田遺跡

調査では人間と牛の足跡を検出しました。足跡の総数は 367 ケで、このうち牛の足跡は 47 ケ見つかっています。部分的な検出でありましたが、足跡の方向から推測すると、真北方向に区画された水田が存在していたと推測されます。なお、水田に伴う畦畔や水路等は後世の削平等により検出されませんでした。

調査地全景

東壁土層

足跡検出状況

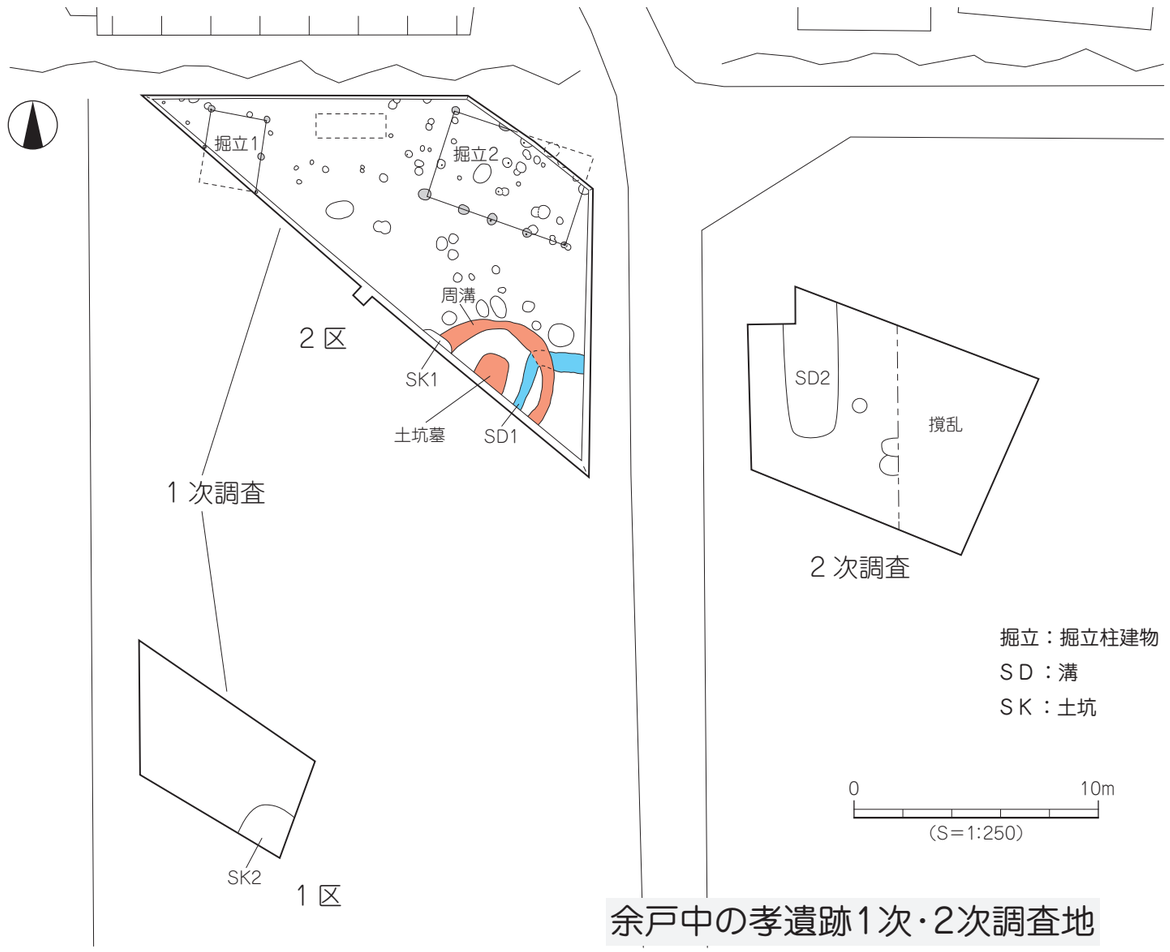
## 余戸中の孝遺跡

1 次調査からは、鎌倉時代の掘立柱建物 2 棟や溝、柱穴のほか土坑墓 1 基を検出しました。掘立柱建物は 1 × 2 間規模（2.2 × 3.0 m）の掘立 1 と、1 × 3 間規模（3.6 × 6.0 m）の掘立 2 があり、掘立 1 が掘立 2 より新しい段階の建物であることがわかりました。また、建物の南側では土坑墓を検出しました。幅 40 ～ 80cm、深さ 20 ～ 40cm、外径 5.5 m の円形状に掘削された溝（周溝）を伴った墓で、中央部には棺（ひつぎ）を埋葬した穴が掘られていました。穴の中からは棺の一部とみられる木片と人骨（頭蓋骨・歯）が出土しました。この墓が作られた時代は、出土品より鎌倉時代（13 世紀）頃と考えられます。

2 次調査では、溝と柱穴を検出しました。

1 次調査地全景

作業風景




余戸中の孝遺跡1次・2次調査地